

〈資 料〉

“Lazarillo de Tormes” (1554) の 文法的特徴についての考察

—「第二章」(その1)—

廣 澤 明 彦

要 旨

本稿は1554年にスペインで出版された“La vida de Lazarillo de Tormes y de sus fortunas y adversidades”に文法的注釈と語釈を加え、試訳を付した資料である。中世スペイン文学やスペイン語史の研究者にとっての資料、大学専門課程の学生が古典スペイン語に触れる際の適切なテキストともなるべく、目指した。

キーワード：ピカレスク小説，中世スペイン語文法，散文

0. はじめに

『ラサリーリョ・デ・トルメス』（“La vida de Lazarillo de Tormes y de sus fortunas y adversidades”）は1554年にスペインで出版された作者不詳の作品であり、「悪漢小説」とも訳される「ピカレスク小説」（novela picaresca）というジャンルの嚆矢とされている。本稿ではその作品の第二章（tractado segundo）に注釈を付し、文法的特徴についての考察を試みた。日本語訳も付したが、既に存在する邦訳の会田（1941，以下

AYL) や牛島 (1997, UNL) とは異なり, 本稿の訳は原文の文法的特徴を出来るだけ反映させようとした試訳である。

底本として Víctor García de la Concha の注釈 (1989, 以下 VGC) のページと行を保ったまま用いた。VGC 以外にも Alberto Blecu (1975, 以下 ALBL), Julio Cejador y Frauca (1962, 以下 JCF), Francisco Rico (2002, 以下 FRCA) の注釈も適宜参考にしている。

尚, 紙数の関係でこの第二章の注釈は複数回に分ける。

1. 注釈

p. 69

TRACTADO SEGUNDO

CÓMO LÁZARO SE ASENTÓ CON UN CLÉRIGO, Y DE LAS COSAS QUE CON ÉL PASÓ

(タイトル)

・tractado→⁽¹⁾ tratado 「論」。tractado segundo で「第 2 論 (章)」, cf. LT1A, タイトルの注。・cómo Lázaro se asentó con un clérigo: cómo 「どのように」の意味の様態の疑問詞であるが, 部分疑問文を形成せず, 第一章のタイトルの構造と同様に, 間接疑問文を形成しており, 主節に相当する箇所は省略されているととる。即ち, *Cuenta*⁽²⁾ *Lázaro cómo* (*Lázaro*) *se asentó con un clérigo*, 「(ラサロが) 如何にしてある聖職者のもとに身を落ちつけたかをラサロは語る」。asentarse には「座る, 身を落ち着ける」という意味に加えて, 「[再帰の asentarse の] se asentó con, 或い

(1) →の記号は現代スペイン語の表記, 及び現代スペイン語の語順を提示する場合に用いた。即ち A→B, 「A は現代スペイン語では B (の語順)」。

(2) イタリックの語は本文には無い語で, 解釈のために筆者が付加した語である。以下同様。

は「自動詞の *asentar* の」 *asentó con* は、文書 (…) によって契約を交わして、働くことに合意すること」(JCF, p.109), 「[再帰ではない] *asentar con amo* は、契約により誰かのもとで働くことを強いること」(COV) といった意味もある。その場合、「如何にある聖職者のもとで働くことになったか」となろう。・ *de las cosas que con él pasó*: この箇所も、*Cuenta Lázaro de las cosas que con él pasó* と補ってとる。*de* は主題「～について」。*que* は関係代名詞で、先行詞は *las cosas*。関係節の核となる動詞定形は *pasó* (<⁽³⁾ *pasar*) で、他動詞ととる。「耐え忍ぶ」。主語は *Lázaro* であり、従ってこの *que* は目的格となる。*con* は同伴の意味で、「～のもとで、について」(TSW)。「(ラサロが) 彼のもとで耐え忍んだ事々について、ラサロは語る」。

和訳 (タイトル)

第2章

ラサロが如何にしてとある聖職者のもとで働くことになったか、そして彼のもとで耐えた事々について語る

p.69

Otro día, no pareciéndome estar allí seguro, fui me 1
a un lugar que llaman Maqueda, adonde me topa-
ron mis pecados con un clérigo, que, llegando a pe-
dir limosna, me preguntó si sabía ayudar a misa. 4

1) otro día: el otro día だと「先日」であるが、al otro día, もしくは otro día は「翌日, またの日に」(TSW), 「翌日 (el día siguiente)」(JCF), 「翌日に (al día siguiente)」(ALBL)。1), no pareciéndome estar allí se-

(3) A < B, 「A は B に由来する」。

guro: parecer の現在分詞がコンマを伴い理由の分詞構文を形成。主格補語が seguro 「安全な」で、主語に相当するのが不定詞を核とする estar allí 「そこにいることは」。接続詞と動詞定形を用いて表すと, como no me parecía seguro estar allí, 「そこにいることが私には安全に思えなかったので」という節に相当するであろう。allí はラサロが盲人を斃したその日のうちに逃げ込んだ Torrijos のこと。1) fuime: → me fui. 2) un lugar que llaman Maqueda: que は関係代名詞で先行詞は un lugar 「町」。節の核となる動詞定形 llaman (<llamar) は無人称で, que は目的格, Maqueda は目的格補語。「マケーダと呼ばれるとある場所」。Maqueda について, 「トレド県の町, トリーホスとエスカローナの間 [にある]⁽⁴⁾」(VGC, p. 69) とある。つまりラサロは一度逃げ込んだトリーホスから事件を起こしたエスカローナ寄りに戻り, マケーダに行ったと解釈できる。「マケーダは(…) エスカローナと同様にユダヤ人が [多く] 居住する街である」(ALBL, p. 113)。2-3), adonde me toparon mis pecados con un clérigo: adonde について「(=donde)」(TSW)。mis pecados 「私の過ち」が toparon の主語である。TSW によれば topar には自動詞と他動詞のいずれの用法もあるが, ここでは他動詞ととり, me を直接目的格とする。「そしてそこにおいて, 私の過ちが私をある聖職者と会わせた」。尚 clérigo 「聖職者」は, p. 72, L17 で自らを sacerdote と呼んでいるのにしたがって, 以後「司祭」と訳すことにする。3-4), que (...) me preguntó: que は関係代名詞で先行詞は clérigo, 説明的な節を導入する。「そして彼は私に (si 以下かどうかを) 質問した」。3-4), llegando a pedir limosna: コンマの後で用いられている現在分詞 llegando (<llegar) は, 時の分詞構文を形成している。「施しを求めに近づいた時」。llegando の意味上の主語は yo

(4) 「」内には引用, 拙訳を用いたが, 原文にないものを [] 内に筆者が補っている。以下同様。

で、対応する動詞定形を用いた節は, cuando llegué a pedir limosna となるだろう。4) *ayudar a misa*: *ayudar a* + 不定詞で, 「～するのを手伝う」の意味があることから, *ayudar a celebrar misa* と補って捉えても良いかとも思うが, *ayudar a misa* について, 「(助祭などが) ミサに仕える」(DEM) という成句がある。

和訳 (p. 69, L1⁽⁵⁾-p. 69, L4)

その翌日, そこ (= トリーホス) にいることが私には安全に思えなかったもので, 私はマケーダと呼ばれている町へと向かいました。そしてそこでは不幸にもある一人の聖職者と出くわしてしまったのです。そして彼は, 私が施しを求めて近づくと, ミサを手伝えるかどうかを私に尋ねたのでした。

p. 69

	Yo	4
dije que sí, como era verdad; que, aunque maltrata-		5
do, mil cosas buenas me mostró el pecador del cie-		
go, y una dellas fue ésta. Finalmente, el clérigo me		
recibió por suyo.		8

4-5) yo dije que sí: 「私はできると (はいと) 言った」と解して良いところであるが, que は本来接続詞であるので, 動詞定形を核とする節が続くことが期待される。即ち, yo dije que sí *sabía ayudar a misa* 「私はもちろんミサが手伝えると言った」。その場合の sí は肯定の強調。5-6) que (...) mil cosas buenas me mostró el pecador del ciego: que は理由の節を導入する接続詞で, porque に相当するものとする。節の核となる動詞定形は *mostró* (<mostrar 「示す」)。主語は後続の el pecador del ciego。先

(5) L=línea 「行」, 即ち L1 「1 行目」, 以下同様。

行する *mil cosas buenas* が直接目的語。即ち, *mil cosas buenas las mostró*。「何故ならあの盲人の悪党は、千もの良いことを私に教えてくれたからです」。5-6), *aunque maltratado*: 接続詞 *aunque* が導入する節の核となるであろう *ser* の定形を補い、受動態が形成されるととる。即ち, *aunque yo era* (あるいは *fui*) *maltratado por el ciego*。「私は(盲人により)虐待されていたとはいえ」。7) *una dellas fue ésta*: *dellas*→*de ellas*。「それらのうちの1つはこれでした」。 *ellas* は L6 の *cosas* を指す。 *ésta* は *misa* を指すともとれそうであるが、これも L6 の *cosas* のうちの1つを指すとする。「それらの良い事々のうち1つがこのことでした」。7-8) *el clérigo me recibió por suyo*: *suyo* は前置詞が先行して伴うことから名詞ととる。*por* は資格の意味「～として」。 *recibir a+人 por esposa* 「～を妻として迎える」(DEM) という用法がある。「司祭は私を彼のものとして迎えた」。FRCA「私を使用人として迎えた」(p.47)。

和訳 (p.69, L4-p.69, L8)

私ではできると答えました。と申しますのも、それは本当のことだったからです。確かに私はいじめられていたとはいえ、あの盲人の悪党めは、私に千もの良いことを教え示したからです。それらのうちの1つがこれだったのです。ついに司祭は私を彼の使用人として迎えたのです。

p.69

Escapé del trueno y di en el relámpago, porque	9
era el ciego para con éste un Alexandre Magno,	10
con ser la misma avaricia, como he contado.	11

9) *escapé del trueno y di en el relámpago*: 「多く記録される諺」(FRCA, p.47), 「古い格言。現代の “*salir de guatemala y entrar en guatepeor*” [「泣き面に蜂／一難去ってまた一難」(DEM)] の意味」(VGC, p.69)。 *dar (>di) en* について, 「ぶつかる」(DEM), 「(en を伴ない, それに)

陥る」(TSW)。直訳は「私は雷鳴から逃れ、そして稲妻とぶつかった」。

10) era el ciego para con éste un Alexandre Magno: →el ciego era un *Alejandro* Magno para con éste. para con について、「[para は] (con を従えて) ～に対して、対する」(TSW)。「あの盲人はこの男に対してはアレキサンダー大王でした」。アレキサンダー大王について、「気前の良さの模範として引き合いに出されるのが常であった」(FRCA, p. 47), 「寛大さの典型」(VGC, p. 69)。11) con ser la misma avaricia: con について、「(不定形に前置されて) ～したにも・であるにもかかわらず (=aunque)」(TSW)。即ち「同じ貪欲さであるにもかかわらず」。11) como he contado: 「既に (盲人について) 申し上げたように」。

和訳 (p. 69, L9-p. 69, L11)

私は雷鳴からは逃れたのですが稲妻に打たれることになりました。なぜかと言いますと、既に申しあげましたようにあの盲人は同じ吝嗇家であったにもかかわらず、この男と比べたらまるでアレキサンダー大王のような気前の良さであったからです。

p. 69

No 11

digo más, sino que toda la lazeria del mundo estaba
encerrada en éste.

13

11-13) この一文では noA sinoB が用いられており、B には節が続くことから接続詞 que + 節となっている。その場合「A ではなく B」。本稿では sino *digo* que と補い、sino を「ただ単に (=solamente)」(TSW) の意味にとる。即ち、「私はこれ以上言いませんが、que 以下とだけ言います」。

12) lazeria: →laceria 「貧苦、悲惨、やっかいなこと」(TSW), 「(稀な使用) 貧窮 (miseria), 貧困 (pobreza)」(RAE23)。miseria には「吝嗇」の意味で用いられるのを考慮して、ここは貪欲の意味に解する。「しみつ

たれ根性」(AYL), 「さもしさといやしさ」(UNL)。

和訳 (p. 69, L11-p. 69, L13)

私はこれ以上お話しませんが, こいつの中には世の中の全ての貪欲さが閉じ込められていたとだけ, 申し上げときます。

p. 69

No sé si de su cosecha era, o lo	13
había anexado con el hábito de clerecía.	14

13) no sé si de su cosecha era: L12 の que 以下の節の内容を受ける, 中性の代名詞 *eso* を *era* (<ser) の主語として補い, 並べかえると, no sé si *eso* era de su cosecha となる。cosecha について, 「動詞 *coger* (つかむ, 取り入れる, 身につける) に由来, *cogecha* とも表記」(AUT)。ser (>era) de をここでは素材の意味にとれば, 「そのことは彼の身につけたことから成るのかどうか, 私は知らない」。ただし, ser de su cosecha 「自分の工夫だ」(TSW), ser algo de la cosecha de alguien 「自身の創意, 工夫である」(RAE23)。この場合, 「そのことは自分の創意であったかどうか, 私は知らない」。先達の訳, 「これがこの男の生来の性質にもとづくものか」(AYL), 「これが生得の性質なのか」(UNL)。13-14) lo había anexado con el hábito de clerecía: この節は L13 の接続詞 *si* が導入する従属節であり, 核となる動詞定形 *había anexado* の主語は司祭。lo は中性の代名詞で, *era* の主語として補った *eso* と同じ節の内容を受ける。「そのことを」。anexar (>había anexado) 「付加する, 併合する」(TSW), 「何かを別のものと結びつけ, それに従属させる」(RAE23)。hábito は「習慣」の意味もあるが, 「僧服」の意味にとる。「司祭の僧服とともにそのことを付け加えていた (のかどうか私は知らない)」。

和訳 (p. 69, L13-p. 69, L14)

そのことは彼の創意から成り立っていたのか, あるいは司祭の僧服とともに

にそのことを身に着けていたのか、私には分かりません。

p. 70

Él tenía un arcaz viejo y cerrado con su llave, la 1
cual traía atada con un agujeta del paletoque; y en
 viniendo el bodigo de la iglesia, por su mano era
 luego allí lanzado y tornada a cerrar el arca. 4

1) él tenía un arcaz viejo y cerrado con su llave: arcaz について, 「箱 (arca)」 (MED), 「大きな箱 (el arca grande)。arca の示大語のようなもの」 (AUT), 「長持ち, 大ひつ」 (TSW)。L4 の arca と同じものを指す。ただし arcaz は男性名詞。viejo 「古い」と cerrado (<cerrar) はいずれも arcaz を修飾し, 等位接続詞の y で並べられているが, 両者ののはたらきは異なる。即ち形容詞の viejo は名詞の arcaz を直接修飾しているだけなのに対し, cerrado は tenía (<tener) の直接目的語である arcaz と一致し, 状態を表わす目的格補語「～してある」と解釈できる。「彼は古い大箱を持っていた。そしてそれを自分の鍵で閉めておいた」。1-2), la cual traía atada con una agujeta del paletoque: agujeta 「両端に先がねのついた紐又はリボンで, 服や履物を留めたり締めたりするもの」 (MED), 「つけ紐, 大針」 (TSW)。paletoque 「修道士の肩衣の様なもので, 2 つの裾のある短マント, 袖なしで膝までの長さ」 (VGC, p. 70), 「かぶり外套, カップ」 (TSW)。関係代名詞 la cual が導入する説明的関係節, 先行詞は llave で, 節の核となる動詞定形 traía (<traer) に対して目的格。atada (<atar 「縛る」) は目的格補語。「そして彼はそれをかぶり外套のつけ紐に結び付けて持っていた」。2-3) en viniendo el bodigo de la iglesia: bodigo 「供物にする上等粉の小型パン」 (TSW)。en + 現在分詞で「～するやいなや」。viniendo<venir 「手にはいる」 (TSW)。de の解釈次第では「教会のパン」か「教会からのパン」か, いずれの可能性もあるが, この後大箱に

投げ込むので、それは信者の見ていないところで行うと想像し、後者の意味の解釈とする。3-4) *por su mano era allí lanzado*: → *luego el bodigo era lanzado allí por su mano*, 「(bodigo は) ただちに彼の手によりそこに投げ込まれた」。4) *tornada a cerrar el arca*: *tornada* < *tornar a* + 不定詞で「再び～する」の意味をあらわす迂言形式である。コンマを伴った過去分詞女性形単数の *tornada* は女性名詞の *el arca* と性数一致し、時の分詞構文的な意味となる。即ち、迂言形式を除くと、*cerrada el arca* 「そして箱が閉められた」となり、これにこの迂言形式を組み合わせたものがこの箇所だのとれる。即ち、「そして再び箱が〔鍵で〕閉められた」。

和訳 (p. 70, L1-p. 70, L4)

彼は古びた大櫃を持っており、自分の鍵でそれを閉めていました。その鍵をかぶり外套のつけ紐と結び付けて持ち歩いていました。そして教会から供物の上等な小型パンを手に入れるや否や、それは彼の手によりそこへ直ちに投げ込まれ、そしてその箱は再び閉められたのです。

p. 70

	Y en	4
toda la casa no había ninguna cosa de comer, como		5
suele estar en otras algún tocino colgado al hume-		
ro, algún queso puesto en alguna tabla, o en el ar-		
mario algún canastillo con algunos pedazos de pan		
que de la mesa sobran; que me parece a mí que,		
aunque dello no me aprovechara, con la vista dello		10
me consolara.		11

4-5) *en toda la casa*: 「家の中全てにおいて」、否定文で用いられているので「家中どこを見ても」の意味。5-6), *como suele estar en otras algún tocino (...)*: *como* は様態の意味の「～のように」であるが、コンマのあ

とで説明的な節を導入していることから、それを生かした訳を難しくしている。en otras *casas* 「他の家々では」。suele estar の主語は後続の algún tocino, よその家々ではいくらかの塩豚肉がいつもあるように」。尚, L9 まで suele estar の主語が, L7 の離接の接続詞 o が用いられ, 3つ並べられている。即ち A, B o C。FRCA の表記に従って L7 のコンマの位置を o の後にずらし, armario の後にコンマを付け加えると, en el armario を挿入句としてとらえることが出来る。即ち, algún queso puesto en alguna tabla o, en el armario, algún canastillo (...). そして o は C の要素に直接かかることが出来, 主語を構成する 3つの要素が A, B o C と明確になる。A は algún tocino colgado al humero, B は algún queso puesto en alguna tabla, C は algún canastillo 以下である。6) humero: humo 「煙」と関連する語である。「煙がそこを通って出る煙突の煙道」(RAE23), 「煙突 (ことにその円筒部)」(TSW)。「煙のための煙突」(JCF, p.111)。SDEJ には「煙突」の意味に加え, 「(スペイン) 豚肉製品を燻製にする部屋」との記載もあるが, そのような部屋が当時どこの家にもあったかどうかは分からない。「[humero には] 血入りソーセージ, 長ソーセージなどのものが吊るされ, 煙で水気をとったり乾かししたりした」(COV)。つまり, 「集煙フード」。tocino はベーコンとも訳されるが, 塩豚肉は当時いわば保存と燻す仕上げを兼ねて humero に吊るされ, 食されていたのだろう。7) algún queso puesto en alguna tabla: L6 の suele estar の主語を構成する 3つの要素のうちの B の部分。スペイン語の tabla の語源であるラテン語の tabŭla は「板状のもの」を意味しているが, 同じくこの語を語源とする英語の table は「テーブルの意味である。現代スペイン語での tabla はラテン語の場合と同様に「板状のもの」の意味が基本である。ただし, 「廃用語, テーブル (mesa), 家具 (mueble)」(RAE21), あるいは AUT によると「平らに薄く切った板, テーブルや大櫃などのようなものに用いる」とあり。この意味に加え, COV は「食事をするテーブル

(mesa)」としている。この箇所では *algunas tablas* とあり、「何らかの板の上に」の意味ととるのが妥当かもしれない。先達の訳、「台の上の戸棚の中に置いてあるチーズだとか」(AYL), 「どこかの台の上とか戸棚に置かれたチーズ」(UNL), “a piece of cheese on a shelf in the pantry” (MAPE)。8-9) *algunos pedazos de pan que de la mesa sobran*: pan 「パン」や前の A, B に現れた *tocino* 「塩豚肉」や *queso* 「チーズ」が物質の不可算名詞であったのに対し, *pedazos* 「かけら」は可算名詞複数であるので「いくつかの」と解する。*que* は関係代名詞で先行詞は *pedazos*, 関係節の核となる動詞定形は *sobran*<*sobrar* 「余る」。mesa には「料理」や「食事」の意味もあることから, この *de* は起点や出所を意味するともとれる。即ち「食事で余ったいくつかのパンのかけら」。9-11) *que me parece a mí que (...) me consolara*: 初めの *que* は一見関係代名詞か接続詞か判断に迷うが, この *que* に続く節の *parece*<*parecer* 「～に見える」に, 更に接続詞 *que* で導入される節が続いている。即ち 3 人称単数で用いられる *parece que* + 直説法の構造であることから, 初めの *que* は *parece* の主語にも直接目的語にもなれず, 関係代名詞ではありえない。従って初めの *que* は軽い理由, 又は意味内容の希薄な接続詞ととることにする。*consolara*<*consolar* 「慰める」の接続法過去形であるが, -ra 型は中世のスペイン語（及び現代スペイン語の文語）では主に直説法過去完了の意味で用いられている。「と申しますのも（それを見ることで）私の目を楽しませたように思えるからです」。10), *aunque dello no me aprovechara*: →*aunque no me aprovechara de ello*。L11 の *consolara* と同様に, *me aprovechara de* (<*aprovecharse de* 「～を利用する」も直説法過去完了の意味にとる。*ello* は中性の代名詞で, 通常解釈では文や事柄を受けるので, ここでは普通の家の中にはどこかに食べ物があるということ, となろう。即ち「確かに私はそのことを利用できなかったとはいえ」。しかしここでの *aprovecharse* を「食べる」の意味に解釈するとすると, L10 の 2 つの

中性代名詞 *ello* は、塩豚肉、チーズ、パンという不可算の物質名詞を受けている可能性が出てくる。廣澤 (2010) で扱っているように、現代のスペイン語においても中央アストゥリアス方言 (及びそれをもとに形成されたいわゆる「標準アストゥリアス語」) では、物質名詞を修飾する形容詞に中性形の独自の語尾 (-o) を備えているが、代名詞がそれらの名詞を受ける場合にも中性代名詞が用いられる (§ 2.2.2)。NGLE1 も中央アストゥリアス方言の「物質の中性 (neutro de materia)」について触れている。「(…) アストゥリアス州及びカンタブリア州で話されているスペイン語のいくつかの変種においては、-u の語尾が不可算名詞と一致する形容詞の語尾の特徴である。farina blancu 「白い小麦粉」 (§ 12.2ñ.)。ここは正しくは「-o の語尾が不可算名詞と一致する形容詞の語尾の特徴である。farina blanco」のはずである。ここで言う不可算名詞とは中性の扱いを受ける物質名詞であるが、アストゥリアス方言には中性名詞と言う範疇は存在せず、従って *farina* も女性名詞である。中央アストゥリアス方言 (及び標準アストゥリアス語) の形容詞の語尾は -u が男性単数 (-os が男性複数), -a が女性単数 (-es が女性複数), -o が中性である。NGLE1 は更に以下のように続けている。「中世のスペイン語では、現代では女性名詞であるいくつかの不可算の具象名詞が男性名詞として用いられていた。(強勢, 無強勢) あるいくつかの代名詞との一致が、中性名詞との一致と解釈しうると誤って思わせてしまったのだ」(id.)。そして *agua* 「水」を受ける代名詞の *lo*, *vino* 「ぶどう酒」, *ungüento* 「香油」を受ける代名詞 *ello* が出現する福音書の例を挙げている。この L10 の箇所先の先達の訳, 「たとえそういうものがわたくしにとって、何ら役に立たないとしても」(AYL), 「よしんば自由に食べることができないにしても」(UNL), “even if I couldn’t eat it” (MAPE)。10) con la vista dello: dello→de ello。「それら (の食べ物) を見るだけで」。con は条件の意味にとれる。

和訳 (p. 70, L4-p. 70, L11)

そして家中どこを見渡しても、いかなる食べ物もありませんでした。よその家では集煙フードに吊るされたいくらかの塩豚肉、あるいは何らかの板の上に置かれたいくらかのチーズ、あるいは棚の中で何かの平かごの中に食事の残りのいくつかのパンのかけらなんかがあるのが常のように。そしてそれらはたとえ食べることができないにしても、それらを眺めているだけで私の心を和ませたように私には思えるのです。

p. 70

Solamente había una horca de cebo- 11

llas, y tras la llave, en una cámara en lo alto de la casa.

13

11-12) horca de cebollas: 「茎付き玉ねぎの編み房、1ヶ所で結んだ2本の縄 [に編み込ん] で作られる」 (RAE23)。horca は「絞首台」の意味であるが、「編み房 (=ristra)」 (TSW), 「2個つなぎ合わせたニンニク (タマネギ)」 (DEM) の意味もある。「[horca は] 同様に茎付きニンニク、或いは玉ねぎの編み房又は縄のことである。これは1か所で結んだ2本の縄 [に編み込ん] で作られることにより、そう [horca と] 呼ばれた」 (AUT)。12), y tras la llave, en una cámara (...): 2つの要素を並べる等位接続詞の y の本来の用法を考慮すると A y B となるべきであり、y B, A となっているこの句は A y B と並べ替えなければならない。即ち, en una cámara (...) y tras la llave。12) tras la llave: 前置詞 tras は時間的に「～のあとで」と空間で「～のうしろに」で用いられる場合がある。前者の場合、「鍵 (を用いた) あとで (小部屋に入る)」, 後者だと「鍵 (で閉めたその) うしろに (小部屋がある)」の意味が想定できる。いずれにしても「鍵がかけられた」との解釈が可能である。12-13) en una cámara en lo alto de la casa: cámara について、「農家で、穀物を取り入れて保存しておくための高い場所」 (RAE23), 「穀物置き場、穀倉」 (TSW)。lo

alto)について、中性の定冠詞 + 形容詞による抽象名詞化の意味に付け加え、「高いところ、てっぺん、天、空」(TSW), 「最も上の部分、又は最も高いところ」(RAE23) といった意味がある。この箇所全体の文字通りの意味は、「その家の高いところにある穀物置き場に」となる。先達の訳、「屋根裏部屋に」(AYL), 「高い屋根裏部屋に」(UNL), “in a room at the very top of the house” (MAPE)。

和訳 (p. 70, L11-p. 70, L13)

その家の高いところにある、鍵のかかった納戸のようなところに、一本の吊るし玉ねぎがあるだけでした。

p. 70

Désta tenía yo de ración una para cada cua-	13
tro días, y, cuando le pedía la llave para ir por ella,	
si alguno estaba presente, echaba mano al falsopec-	15
to y, con gran continencia, la desataba y me la	
daba diciendo:	17

13-17) この長い 1 文の中に接続詞の y が 3 つ用いられて、4 つの節が並べられた形となっている。即ち、L16 の最後の y 以外は余剰、あるいは IEM (p. 83) が指摘しているように文導入の役割を担っているととれる。A y B y C y D であるが、A, B, C y D。A の核となる動詞定形は L13 の tenía, B は L15 の echaba, 尚この B が主節となり、L14 の cuando, L15 の si で導入される節が従属節となる。C の核となる動詞定形は L16 の desataba, D は L17 の daba が核となる。13-14) désta tenía yo de ración una para cada cuatro días: →yo tenía de ración una de éstas para cada cuatro días。una も éstas も cebolla (s) を受ける。即ち una *cebolla* de éstas 「これらのうちの 1 つの玉ネギを」, あるいは una de *estas cebollas* 「これらの玉ネギのうちの 1 つを」。いずれの場合もこの句は tenía の

直接目的語である。ración「食料などの1回分, 1日分」(TSW)。deは役割の意味, 「1日分の食料として」。paraは分量の意味, 「4日それぞれ用に」。「これらのうちから1つを4日ごとに1食として私は手にしていた」。14) para ir por ella: ir por「～を取りに行く」。ellaはcebollaを受ける。「それを取りに行くために」。15-16) falsopecto:「服の芯地の胸の高さのところにこしらえたポケット」(VGC, p. 70)。falsoは「偽の」の意味に加え, 「補強の, つけ足しの」(TSW)の意味がある。pecto→peto「胸当て」。falsopetoの表記でCOVに記載がある。即ち, 「上っぱり[ここで「上っぱり」と訳したsayoは, p. 70, L2のpaletouqueに相当する]に付けられたポケットで, 胸の上に垂れる。そしてそこは腰巾着や他の場所よりもお金を安全に入れておけると思われた。それは目の前にあることで[それを着ている者に]気付かれずに盗むことができないからである(…)]」。16-17) la desataba y me la daba: ここの2つのlaはいずれもllave「鍵」を受ける。「鍵の紐をほどき, そして私にそれを与えた」。

和訳 (p. 70, L13-p. 70, L17)

4日ごとに1食分として, これらの中から1つの玉ねぎを私はもらっていました。そしてそれを取りに行く際, 彼に鍵を借りるときに誰かがその場に居合わせようものなら, 胸の後付けポケットに手を差し入れ, ひどくもったいをつけて鍵の紐をほどき, 以下のように言いながら私にそれを渡したものでした。

p. 70

—Toma y vuélvela luego, y no hagáis sino go- 18
losinar. 19

18) toma, y duélvela luego: tomaはtomar「取る」の2人称単数túに対する肯定命令「取りなさい」であるが, 物を渡す時の「ほら」の意味でもあり得る。vuelve<volver, 他動詞「戻す」の2人称単数túに対する肯定

命令。la は la llave「鍵」を受ける直接目的格人称代名詞。luego「(副詞, 廃用語) 早く, 遅れずに, ([ラテン] アメリカで使用 [される意味])」(RAE23)。「すぐに, やがて (=prontamente)」(TSW)。現代スペイン語では「あとで」の意味で用いられるが, ここは「すぐに」の意味にとる。接続詞の y は逆接の「しかし」の意味で用いられているととる。「ほらお取り, けどすぐにそれを返すんだよ」。18-19) no hagáis sino golosinar: golosinar は golosina「おいしい物, ごちそう」(TSW), 「果物や甘いもので, 食事としてではなく嗜好で食されるもの」(COV) を食べることである。cf. LT1C, p. 63, L15. golosinar=golosinear「あまい物ばかり食べる, 美食する」(TSW)。RAE23 も golosinear と同義とし, golosinear は「(自動詞) お菓子を食べたり探したりすること」としている。AUT は「golosinar あるいは golosinear は golosmear と全く同じである」とし, golosmear について「お菓子をこっそり食べ歩くこと」という定義ののちに, “Lazarillo” 第2章のこの箇所を, golosmear を用いて引用している。即ち, “Toma y vuélvela luego, y no hagais (sic) sino golosmear”。hagáis<hacer の接続法現在, no との組み合わせで否定命令, 2 人称複数の敬称の vos「あなた」に向けたものである。toma と vuélvela は tú に対するの命令であったが, vos は tú と混用されることがあった (IEM, p. 41 及び GLE, p. 597)。sino~で, 「~のほかは」, 即ち, 「golosinar するほかは (何も) してはいけません」。第3者が居合わせる場であるので, 司祭としては当然ラサロにはきちんとした食事をきちんと別に与えていると思われたことは想像できる。その上でこの場では golosina をねだってきたラサロに鍵を渡すと思われた。したがってここでの golosinar は「ごちそう」ではなく「お菓子」を食べることである。それはこの後出てくる conserva「砂糖漬けフルーツ」からも明らかである。もう1つ, 鍵のかかる場所であれば大事なものの保管されていると通常人は考える。したがって「お菓子だけ食べて他の大事なものに触ってはいけないよ」の意味が

no hagáis に込められているとも言えよう。

和訳 (p. 70, L18-p. 70, L19)

「ほらお取り，ただけですぐにそれを返すんだよ。甘いものを食べるだけで，他のことをしちゃいけないよ」。

p. 70

Como si debajo della estuvieran todas las conser- 20
vas de Valencia, con no haber en la dicha cámara,
como dije, maldita la otra cosa que las cebollas col-
gadas de un clavo, las cuales él tenía tan bien por
cuenta, que, si por malos de mis pecados me des-
mandara a más de mi tasa, me costara caro. 25

20-21) como si debajo della estuvieran todas las conservas de Valencia:
→como si todas las conservas de Valencia estuvieran debajo de ella.
como si+接続法過去で「まるで～であるかのように」, estuvieran<estar
の接続法過去 3 人称複数, 主語は todas las conservas de Valencia. conser-
serva は現代スペイン語では, 特に断りのない場合, 缶詰を指す。「砂糖
や蜂蜜で加工された果物」(COV), 「果物と砂糖または蜂蜜で作られる加
工品で, 保存されるような状態にされる」(AUT), 「砂糖漬けの果物」
(TSW)。debajo de 「(古) ～の保護のもとに・の」(TSW)。「中世にお
いて, バレンシアから東洋の菓子もたらされた」(JCF, p. 112) ことか
ら, ここの de は起点ととる。「まるでこの鍵のもとにはバレンシアから
の全ての砂糖漬けの果物があるかのように」。21) con no haber en la di-
cha cámara: con+不定詞で譲歩の意味, 「(不定形に前置されて) ～した
にも・であるにもかかわらず (=aunque)」(TSW)。cf. LT1C, p. 64,
L13. haber は一般動詞として存在を表現する用法(直説法現在形だと
hay) で, その目的語は L22 の maldita 以下の箇所。「前述の部屋には L22

以下しかなかったにもかかわらず」。22) *maldita la otra cosa que*: L21 の *con no haber* の目的語の核となる部分である。no...otra cosa que で「que 以下だけ」(DEM)。maldito について、「(否定語句のなかで、副詞的) 少しも～ない」(TSW), 「(+冠詞+名詞) 少しも～ない」(DEM)。「que 以下 (釘にぶら下がった玉ネギ) だけしか少しも (なかったにもかかわらず)」。23), *las cuales él tenía tan bien por cuenta: las cuales* は説明的な関係節を導入する関係代名詞, 先行詞は L22 の *las cebollas*, 導入する節の核となる *tenía* に対して目的格。tan bien は L24 の que 以下と相関して用いられている。por cuenta 「数えることにより」, 「十分に数えた (*bien contadas*)」(JCF, p. 112)。「そして彼はそれらを数えることにより, あまりに十分に持っていたので (L24 の que 以下であった)」。24), *que*: L23 の tan bien と相関して用いられる節を導入している接続詞で, L25 の *me costara caro* が続く。24-25) *si por malos de mis pecados me desmandara a más de mi tasa*: 接続詞 *si* により導入される条件節で, 核となる動詞定形は *me desmandara*, 主節 (帰結節) は L25 の *me costara caro* で, 同時にこの節は L23 の tan bien とも相関して用いられている。por malos de mis pecados には「私の罪・せいで」(TSW), 「(副詞節, 廃用語) 私のせいで (*por mis pecados*)」(RAE23) といった成句としての意味もあるが, 文字通りの意味は「私の罪業の中の悪魔によって」である。me desmandara<desmandarse 「反抗する, 抑えがきかない」(TSW), 接続法過去が用いられているが, 過去の反事実であれば接続法過去完了の *me hubiera desmandado* が用いられるところである。cf. IEM (p. 130-p. 131)。a más には además の意味もあるが (TSW) ここは成句とはとらずに a más de mi tasa 「私の割り当て以上に (対して)」の意味にとる。25) *me cosatara caro*: 条件文の帰結で, 過去未来 (完了) の代わりに用いられる接続法過去の -ra 型の用法ととる。即ち, *me constaría caro* に対応する。ただし, 過去の反事実に対する帰結であれば過去未来完了の *me habría*

costado caro が用いられるところである。cf. IEM (p. 130-p. 131)。costar caro a + 人は、「～に高い代償を支払わせる」(DEM)。

和訳 (p. 70, L20-p. 70, L25)

まるでその鍵のもとではバレンシアからのありとあらゆる砂糖漬けの果物があるかのような口ぶりでしたが、既に申し上げましたように、その納戸のような部屋の中には釘にぶら下がった玉ネギしかなかったのです。そしてそれらを彼はあまりにもしっかり数えていたので、もし私の罪業の中の悪魔のささやきによって、割り当て以上を求めて自身を抑えなかったとしたら、きっと高い代償を払わされていたでしょう。

p. 70

Final- 25

mente, yo me finaba de hambre. 26

26) me finaba de hambre: finar 「死ぬ、物故する」(TSW), 「自動詞, 死ぬ, 亡くなる, 代名動詞 [→再帰動詞] としても用いられていた」(RAE21)。再帰の finarse だと「欲しがる」(TSW) とあるが, JCF は「死ぬ (acabar, morir)」(p. 113) としている。線過去で「死にそうだった」。de は原因, 「空腹で」。

和訳 (p. 70, L25-p. 70, L26)

ついに私は空腹で死にかけてしまったのです。

p. 70

Pues ya que conmigo tenía poca caridad, consigo 27

p. 71

usaba más. 1

27) ya que conmigo tenía poca caridad: ya que は現代スペイン語では「自明の理由」の節を導入するが, TSW に「～する, したからには」とある

ように、ここは譲歩の意味にとる。語を補い並べ替えると、*ya que el clérigo tenía poca caridad conmigo* 「司祭は私にはほとんど慈悲を持たなかったけれども」となろう。ただし JCF (p. 113) はこの *ya que* について、時、原因、譲歩のいずれの意味の接続詞でもあり得るとしている。27-p. 71, L1) *consigo usaba más*: → *el clérigo usaba más caridad consigo* 「司祭は自身にはより多くの慈悲を用いていた」。尚、*caridad* は「施し物」の意味でも用いられる。

和訳 (p. 70, L27-p. 71, L1)

つまり彼は私に対してはほとんど施しをしませんでしたが、自分自身にはより多くの施しをしていたのです。

p. 71

Cinco blancas de carne era su ordinario	1
para comer y cenar.	2

1) cinco blancas de carne: 「5 ブランカ分の肉」。blanca は当時の貨幣。「1 ブランカ貨は当時半マラベディの価値があった」(VGC, p. 54)。cf. LT1A, p. 54, L21-L23 及び p. 58, L8。「当時牛肉 1 リブラ [重さの単位 libra は「ポンド」と訳される。1 ポンド約 460 グラムであるが、この libra は「Castilla では約 500 グラム」(SDEJ) であることから、VGC はこれに従っているととれるため、「リブラ」と「ポンド」を区別しなければならない] が 10 ブランカほどであった。それに従えば [5 ブランカで買える牛肉は] 一日 250 グラム以下であっただろう」(VGC, p. 71)。1) ordinario: 「それぞれの家の一日分の出費、同様に特別な出費を含めない日々の食費」(AUT), 「常食, 不断の食, 日々の雑費」(TSW)。

和訳 (p. 71, L1-p. 71, L2)

肉 5 ブランカ分 [当時 250 グラム弱] が昼食と夕食用の彼の食費でした。

p. 71

Verdad es que partía comigo 2

del caldo, que de la carne ¡tan blanco el ojo!, sino
un poco de pan, y ¡pluguiera a Dios que me deme-
diara!

5

2-3) verdad es que partía comigo del caldo: →verdad es que *el clérigo* partía del caldo *comigo*. verdad es que 「ほんとに～である、～とは真実だ」(TSW)。partía<partir 「分ける」は他動詞であるが、del>de は部分の用法。「(部分, 全体から一部をとる場合, ～を, の中から)」(TSW)。FRCA (p. 50) によると, こういった部分の用法は 1575 年頃まで普通に用いられていたという。「実際には彼はスープを私と分けていた」。3), que de la carne: この que は関係代名詞あるいは接続詞, それぞれの場合について考察した。前者の場合, 先行詞は el caldo で説明的な関係節を導入する。節の核となる動詞定形を補うと, que *era* de la carne 「そしてそれ (= スープ) はその肉に由来するものであった」。この que を接続詞ととる場合には, L2 の que と同格で, *verdad es que partía* de la carne 「実際には肉を分けていた」となろう。ちなみに JCF, ALBL の版でのこの箇所の表記は説明的な節ではなく, Verdad es que partía comigo del caldo. Que de la carne, (...) と別の文となっている。この場合, 様々な用法を想定させる文頭の que の解釈も可能であろう。de についても主題の意味で「肉に関して言えば」ととれるかもしれない。3) ¡tan blanco el ojo!: 「何もないと言っていいほど肉が取り除かれた」(VGC, p. 71), 「白目の部分のように何も残っていなかった, 即ち, それを食すことはなかった」(JCF, p. 113)。AUT は poner los ojos en blanco については, 「何らかの強い感情を伴い, 目を空に向ける者のことを言う。つまり上を見るためには瞳をまぶたに向けなければならず, 白目の部分が露わとなり, 目はほとんど白だけのように見える」としている。つまり日本語の「目を白黒させ

る」に相当し、そこから察すると *¡tan blanco el ojo!* は、「驚くほど否定的な量の」の意味になるかもしれない。L3 の先達の訳、「肉ときたら、ちらとお目にかかったこともございません」(AYL), 「私は肉というものを口にするにはおろか目にしたことすらありません」(UNL), “but as for the meat I had a hope!” (MAPE)。3-4), *sino un poco de pan.*; この *sino* は *no* と相関して用いられているとはとらず, *solamente* の意味にとる。即ち動詞を補うと, *sino (=solamente) había un poco de pan*, 「たゞわずかなパンがあっただけでした」。4-5) *¡pluguiera a Dios que me demediara!* *pluguiera* < *placer* + *que* + 接続法, 「*que* 以下が (間接目的語にとって) うれしい」, この場合の *placer* は自動詞としての解釈となる。*pluguiera* は *placer* の不規則な点過去 3 人称複数 *pluguieron* から派生した接続法過去の -ra 型で, 直説法の意味を持つ。ここは過去の推量の意味で用いられている過去未来の *placería* と交替可能なものとする。即ち, *placería a Dios que el clérigo me demediara* 「司祭が私に半分くれたことが神様には嬉しかっただろう」。cf. LT1C, p. 64, L16。あるいは *placer* を他動詞ととり, *que* を *si* と読み替えられれば, 反事実の条件文ともとれる。即ち, *placería a Dios si el clérigo me demediara* 「もし司祭が私に半分くれるとすれば, 神様を喜ばせるだろうに」。

和訳 (p. 71, L2-p. 71, L5)

たしかに彼は私にスープを分けてはくれましたが, 肉に関しては, 驚くべきほどの少なさだったのです! わずかなパンだけしかありませんでした。それでも私に分けてはくれたのですから, 神様を喜ばせあそばしたんでしょうね。

p. 71

Los sábados cómense en esta tierra cabezas de
carnero, y enviábame por una, que costaba tres ma-

ravedís.

8

6) cómense: →se comen, 再帰受け身で主語は cabezas de carnero, 「羊の頭が食される」。6) esta tierra: 「この土地」, 即ちラサロがたどり着いて司祭と出会った Maqueda を含む地域。当時イベリア半島の他の王国では土曜日に断食を行っていたが, カステイーリャでは腿肉やハム以外の頭部や首筋といった部位を食する習慣があった (FRCA, p.50)。ちなみに『ドン・キホーテ』前篇第1章で, 毎週土曜日に主人公が食べていた duelos y quebrantos, この語の連続で「ラ・マンチャでの卵と脳みそ (sesos) のオムレツ」(AUT) という1つの料理を意味するが, これは『ラサリーリョ・デ・トルメス』の「この箇所に現れる」羊の脳みそを使ったもの (JCF, p.115) であり, 「セルバンテスは恐らくこの一節を引用したか念頭に置いている」(id.) という (ただしロドリゲス・マリン I (p.50) は seso ではなく torrezno 「豚肉の揚げ物」(TSW) と卵のオムレツとしている)。7) enviábame por una: →me enviaba por una。me は直接目的格「私を」。enviaba<enviar 「使いに出す, 派遣する」(TSW)。por 「～を取りに, 買いに」(TSW)。una は cabeza を受ける。「(羊の頭を) 1つ買うのに彼は私を使いに出していた」。7-8), que costaba tres maravedís: que は関係代名詞で, 先行詞は una (cabeza)。「そしてそれは3マラベディの値段がしました」。2マラベディ = 1ブランカなので, 3マラベディは1.5ブランカである。ちなみに平日に司祭が肉に費やす金額は, L1にあるように5ブランカであった。

和訳 (p.71, L6-p.71, L8)

この土地では毎週土曜日に羊の頭を食べるのがならわしなのですが, 彼はそれを1つ買うのに私を使いに出していました。そしてそれは3マラベディの値段でした。

Aquella le cocía, y comía los ojos y la lengua y el cogote y sesos y la carne que en las quijadas tenía, y dábame todos los huesos roídos; y dábamelos en el plato, diciendo: 8 10 11

8) aquella le cocía: aquella は cabeza を受ける指示代名詞で, cocía<cocer 「煮る」に先行する直接目的語。この場合に必要ない目的格代名詞 la の代わりに le が用いられている。即ちレイスモ。aquella la cocía el clérigo 「司祭はそれを煮ていました」。8-9) comía los ojos y la lengua y el cogote y sesos y la carne (...) : comía<comer 「食べる」の直接目的語の羅列に, 等位接続詞の y が多用されているが, 中世のスペイン語の特徴とする。現代スペイン語風にすると, comía los ojos, la lengua, el cogote, sesos y la carne (...) となろう。9-10) la carne que en las quijadas tenía: que は関係代名詞で先行詞は la carne 「肉」, 節の動詞 tenía<tener 「持つ」に対して目的格, tenía の主語は la cabeza で, 語を補い並べ替えると, la carne que la cabeza tenía en las quijadas 「(羊の) 頭があごの骨に持っていた肉」。10) dábame todos los huesos roídos: →me daba todos los huesos roídos (<roer 「かじる」の過去分詞), me は間接目的格「私に」, 直接目的語は todos los huesos roídos 「かじった骨の全てを」。普段の食事よりもこの土曜日の食事は質素であるため, 司祭が骨までしゃぶりつくした様が想像できる。10-11) dábamelos: →me los daba 「彼は私にそれを与えたものでした」。

和訳 (p. 71, L8-p. 71, L11)

彼はそれを煮て両の目や舌, 首筋, 脳みそ, そしてあごの骨に付いていた肉を平らげました。かじりつくした全ての骨は私にくれました。それらを私の皿によそりながら, 言ったものです。

—Toma, come, triunfa, que para ti es el mundo. 12

12) triunfa: <triunfar「派手に使う」(RAE23), 「はでに・きらびやかにやる」(TSW) の 2 人称単数に対する肯定命令。12), que: 軽い理由を導入する接続詞の que ととる。説明的な節を導入する。「何故なら」。12) para ti es el mundo: es の主語は先行する「取り, 食べ, 派手にやる」ことととれば, 中性の代名詞を補った para ti *esto* es el mundo と想定できる。ただしその場合 p. 70, L10 で触れたように, 骨という不可算の物質名詞の可能性も出てくる。この箇所での mundo について, コメントしている文献はなかった。即ち, 「君にとって(それは)世界である」。先達の訳, 「世界はお前の思いのままだからね」(AYL), 「世界はお前のためにあるんだから」(UNL), “The world’s your oyster” (MAPE)。ところでこのあと p. 72, L17-L19 の司祭のセリフを考慮すると, ここは皮肉や意地悪といった裏の意味が込められているととるのが妥当であり, 先達の訳にももちろんそれは反映されている。ちなみに mundo には「修道生活とは対立する, 世俗に固有の生活」(RAE23), 「俗界」(TSW) といった意味もある。その場合, 節制を旨とする修道生活とは異なり, 俗世間というものは, 自分は決してしないシラサロもその同じ場所に身を置いてはいるが, 食べて派手にやることだと教え諭しているかのようである。

和訳 (p. 71, L12)

「お取り, お食べ, 派手におやり, なぜなら今のお前にとっちゃそうすることが娑婆の生活ってもんだからね。

p. 71

Mejor vida tienes que el papa. 13

13) mejor vida tienes que el papa: →tienes mejor vida que el papa. que は比較の対象を導入する接続詞。「君は教皇よりも良い生活を持っている」。このセリフに関しても, 節制生活の長たる教皇よりも, 俗世間は良

いものを食べている, という意味にとる。

和訳 (p. 71, L13)

お前は教皇様よりもずっと良い暮らしなんだよ」。

p. 71

“¡Tal te la dé Dios!” , decía yo paso entre mí. 14

14) ¡tal te la dé Dios!: 文頭に *que* や *ojalá que* を用いず, 接続法現在 *dé* (<dar 「与える」) だけを用いた独立願望文。tal は副詞で「そのように」, la は *vida* を受ける。即ち, *¡ojalá que Dios te la dé tal!*, 「神が君にそれをそのように与えますように」。14) *paso*: 「(副詞) 静かに, 小声で, そっと, ゆっくり」(DEM)。14) *entre mí*: 「自分の中で」, つまり「心の中で」。

和訳 (p. 71, L14)

「神様があなたにもこんな暮らしを与えますように」, 私は心の中でそっと申し上げました。

p. 71

A cabo de tres semanas que estuve con él, vine a 15
tanta flaqueza, que no me podía tener en las piernas
de pura hambre. 17

15) a cabo de tres semanas que estuve con él: a cabo [de] について, 「después de (「～ののちに」) と同じ」(AUT)。*que* は関係代名詞で, 先行詞の *tres semanas* が時の意味なので前置詞の *en* が省略されている。即ち, *tres semanas en que estuve con él* 「私が彼といた3週間ののちに」は」。15-16) *vine a tanta flaqueza*: *vine*<*venir a* について, 「(a+名詞を従えて, その状態・実行に) うつる」(TSW)。「私はあまりのやせ細りに移った(となった)」。尚この *tanta* は L16 の *que* と相関して用いられている。16) *que no me podía tener en las piernas*: この *que* は L16 の *tanta*

と相関して用いられている。即ち tantoA que B, 「あまりの A なので B (する)」。B の節の核となる動詞定形は podía<poder であるが, tenerse 「立つ」が意味的な核となる。「あまりのやせ細りで, 私は両足で立つことが出来なかった」。17) de pura hambre: de puro 「ひどく, 極度に」(TSW), 「あまり～なので」(DEM) といった慣用表現の説明を待つまでもなく, ここの de は原因ととり, 「純粋な空腹により」といった意味を導き出せるであろう。

和訳 (p. 71, L15-p. 71, L17)

彼とともに 3 週間いたのちには, 私はあまりにもやせ細ってしまったので, 完全な空腹が原因で両の足で立つことが出来なくなってしまったのです。

p. 71

Vime claramente ir a la sepultura, 17

si Dios y mi saber no me remediaran. 18

17) vime claramente ir a la sepultura: vime→me vi (<ver の点過去 1 人称単数), ver を用いた知覚構文で, 人の目的語は主語と同人称, 数の再帰代名詞の me が担う。目的語の動作をあらわす不定詞は ir, 即ち, 「私は私自身が墓へ行くのをはっきりと見た」。ただしこの節は L18 の反事実の条件文の帰結節となっているので, その場合, 過去未来を用いた me vería, あるいは線過去の me veía と読み替えなければならない。「私は自身が墓に行くのをはっきりと見たことでしょう」。18) si Dios y mi saber no me remediaran: remediaran<remediar 「救済する」の接続法過去形。過去の半事実の条件節であるので, 現代スペイン語では me hubieran remediado が対応するが, IEM (p. 130-p. 131) によると, 16, 17 世紀になってからも単純形 (接続法過去形) で過去の半事実の条件節を表すことができたという。

和訳 (p. 71, L17-p. 71, L18)

もし神様と私の知恵が私を救わなかったとしたら、私は自身が墓に入るのをはっきりとみてしまったことでしょう。

p. 71

Para usar de 18

mis mañas no tenía aparejo, por no tener en qué darle salto.

20

18-19) para usar de mis mañas no tenía aparejo: usar de について、「(de) を従えて、～を) 使う」(TSW), 「(文語) (最大限に, +de を) 利用する」(DEM)。Para は対比の意味, 「～するには」。「私の計略を使うにしても、準備をしていなかった」。19-20), por no tener en qué darle salto: por は理由の意味で説明的に用いられる。「なぜなら持っていなかったからだ」。dalle→darle, 不定詞に無強勢代名詞が前接する場合の同化現象 (IEM, p. 155)。le は間接目的格で「彼に」, 直接目的語は salto 「襲撃 (=asalto)」(TSW)。qué + 不定詞で「何を (不定詞) すべきか」であるが、ここでは qué に en が伴うので、不定詞 dar の直接目的語の役割を担うことはできない。即ち、「何において与えるべきか」。Dar の直接目的語は salto 「襲撃」であるので、「なぜなら何において彼に襲撃を与えるかを持っていなかったからだ」となろう。

和訳 (p. 71, L18-p. 71, L20)

ただ私の術策を弄するにしてもお膳立てが整ってませんでした。と申しますのも、彼には攻撃を加えるところがなかったからなのです。

p. 71

Y aunque algo hubiera, no podía cegalle,

20

como hacía al que Dios perdone, si de aquella cala-

bazada feneció, que todavía, aunque astuto, con fal-

talle aquelpreciado sentido, no me sentía; mas es-

23

p. 72

totro, ninguno hay que tan aguda vista tuviese

1

como él tenía.

2

20) aunque algo hubiera: →aunque hubiera algo. hubiera<haber の接続法現在, は現在の反事実ではなく, 過去の単純な仮定を表すものとする。「たとえ(彼に攻撃を加えるための)何かがあったとしても」。20) no podía cegalle: cegalle→cegarle. cegar は他動詞で「失明させる」, le はレイスモで「彼を」, 司祭を指す。「彼を失明させることはできなかった」。ここは, 目の見えないのを良いことに悪事をはたらく, の意味にとる。21) como hacía al que Dios perdone: →como yo hacía al *ciego*, que Dios perdone. que Dios perdone は LT1A, p.47, L6 でも亡くなったラサロの父親に対して que を文頭に用いた願望文として, コンマを伴って挿入されていた。ここでは *ciego* を補い, 同様に挿入句としてとる。「(もし死んでたら) どうか神様お赦しくくださいますよう願っている, あの盲人に私がしていたように」。21-22) si de aquella calabazada feneció: de は原因の用法で「あの頭突きにより」, feneció<fenecer 「死ぬ」, つまり 1 章の終わりでラサロが盲人を石柱に激突させたエピソードを指す。ラサロは犯行後その場を立ち去ったので盲人の生死を確認していないが, 「もしあの頭突きにより死んでいたら(神様どうか彼をお赦しくください)」の意味。22-23) que todavía, aunque astuto, con faltalle aquelpreciado sentido, no me sentía: →, que no me sentía todavía con *faltarle* aquelpreciado sentido aunque *fue* astuto. que は関係代名詞で, 先行詞は L21 で補った *ciego*, 説明的な関係節を導入, 「そして彼は」。aunque *fue* astuto 「確かに彼は狡猾であったが」。con *faltarle* aquelpreciado sentido, con+不定詞で理由の意味。faltar 「欠ける」は自動詞で, 主語は後続の *aquelpreciado*

sentido, 「あの大切な感覚」, つまり視覚のこと。le は L20 の場合と異なり, 司祭ではなく盲人を指し, 間接目的格。「彼にはあの重要な感覚が欠如していたので」。no me sentía todavía, todavía は「それでも (=con todo eso)」(TSW)。「(狡猾であったが) それにもかかわらず私のすることに気付きませんでした」。「そしてその盲人は, あの重要な感覚が欠けていたために, 確かに狡猾であったにもかかわらず, 私のすることに気付かなかったのです」。23) mas estotro: mas→pero. estotro 「(古・方) (este と otro の収約形) このほかの, もひとつの (もの)」(TSW)。この語は司祭を指すが, 後続の節は hay を核とするのでその要素にはなっていない。ここは「しかしこの男に関しては」の意味にとる。p. 72, 1-2) ninguno hay que tan aguda vista tuviese como él tenía: →no hay ninguno que tuviese vista tan aguda como él tenía. que は関係代名詞で先行詞は不特定な ninguno であるため, 節の核となる動詞定形に接続法の tuviese が用いられている。「彼が持っていたほど鋭い視覚を持っていた者はだれもない」。

和訳 (p. 71, L20-p. 72, L2)

そしてたとえ何かあったとしても, ああもしあの頭突きで死んでいたらどうか神様にお赦しいただきたいあの, 盲人に私がしていたようには, 司祭の目を盗んで何かをすることは出来ませんでした。あの盲人は視力という重要な感覚が欠けていたために, 確かに狡猾であったにもかかわらず, 私のすることに気付かないでいたのです。ところがこの司祭ときたら, 彼ほどの鋭い視覚を持っていた者は誰もいないのです。

p. 72

Cuando al ofertorio estábamos, ninguna blanca	3
en la concha caía, que no era dél registrada: el un	
ojo tenía en la gente y el otro en mis manos.	5

3) cuando al ofertorio estábamos: →cuando estábamos al ofertorio. ofertorio 「(パンとぶどう酒の) 奉献」(DEM), 「聖餐奉献, 奉献の祈り (ミサの一部)」(TSW)。estar a について, 「estar a+名詞, 名詞の意味する行為をする」(TSW)。「我々が聖餐奉献を執り行っていた時」。3-4) ninguna blanca en la concha caía: →ninguna blanca caía en la concha. concha 「貝殻」について, 「聖餐奉献の間に, 今日用いられる献金箱, お布施箱のように, 貝殻に [お金を入れるよう] 求められた」(JCF, p.117)。「いかなるブランカ貨も (お布施集めの) 貝殻には落ちなかった」。4), que no era dél registrada: que は説明的な関係節を導入する関係代名詞, 先行詞は L3 の ninguna blanca。era と registrada は受動態を形成しており, 並べ替えると, que no era (fuera) registrada de él, 「そしてそれは彼によって記録されなかった」。ただしこの箇所は説明的ではなく, FRCA, ALBL の表記のように限定的な関係節ととることにする。即ち, ninguna blanca que no era (fuera) registrada de él caía en la concha, 「彼の目を逃れたいかなるブランカ貨も, その貝殻の中には落ちなかった」。4-5) el un ojo tenía en la gente y el otro en mis manos: tener los ojos en A, 「A をじっと見つめる」(DEM) という意味があり, 両方用いて見るのが常である複数形の ojos が使われるが, この箇所は el un ojo, el otro *ojo* と単数形の ojo で, 片方ずつ見つめていることが表されている。即ち, tenía el un ojo en la gente 「片方の目で人々を見つめ」, y *tenía* el otro *ojo* en mis manos 「そしてもう片方の目で私の両手を見つめていた」。

和訳 (p. 72, L3-p. 72, L5)

我々がミサで奉献の祈りを執り行っていた際などには, 彼に記録されなかったいかなるブランカ貨も, お布施集めの貝殻に落ちることはありませんでした。つまり片目で信者に, そしてもう片方の目で私の両手に視線を浴びせていたからです。

p. 72

Bailá- 5

banle los ojos en el caxco como si fueran de azogue. 6

5-6) bailábanle los ojos: →los ojos le bailaban. le は間接目的格で、ここでは関与の与格の用法ととる。直訳すると「彼に両目が踊っていた」。6) caxco: =casco (AUT, MED), 即ち「頭蓋骨」(TSW)。6) como si fueran de azogue: ser (>fueran) de による素材を意味する用法ととる。「まるで水銀で出来ているかのように」。

和訳 (p. 72, L5-p. 72, L6)

まるで水銀でもできているかのように、彼の頭蓋骨の中で両の目が踊っていたのです。

p. 72

Cuantas blancas ofrecían tenía por cuenta, y, acaba- 7

do el ofrecer, luego me quitaba la concha y la ponía

sobre el altar. 9

7) cuantas blancas ofrecían tenía por cuenta: 関係形容詞 *cuantas* が導入する節全体が, *tenía* の目的語となっている。ofrecían<ofrecer 「提供する」の3人称複数で、主語は信者達、あるいは無人称ともとれる。その場合「提供されたブランカ貨は全て」。por cuenta 「数えることにより」。tenía<tener の主語は司祭。語を補い並べ替えると, *el clérigo tenía cuantas blancas ofrecían ellos por cuenta*, 「司祭は彼らが提供したブランカ貨は全て数えることにより持っていた」。7-8), acabado el ofrecer: el ofrecer は不定詞に定冠詞を伴い名詞化, 「お供えすること」acabado<acabar の過去分詞, ここはコンマの後に位置し, 時の分詞構文的に用いられているととる。「お供えが終わると」。8) luego me quitaba la concha: luego は副詞で「直ちに」。me は間接目的格で、ここでは「私から」。「(司祭は) 私

から貝殻を取り上げた」。尚, JCF, ALBL では concha の代わりに concheta の語で表記されている。その場合, concha+示小辞と理解する。9) altar:「祭壇」。

和訳 (p. 72, L7-p. 72, L9)

信者が供えたブランカ貨は彼が全て数えることにより把握しており, そしてお供えが終わるとすぐに私から貝殻を取り上げ, それを祭壇の上に置いていたのです。

p. 72

No era yo señor de asirle una blanca todo el tiempo 10
po que con él viví, o, por mejor decir, morí. 11

10) no era yo señor de asirle una blanca: no era yo señor→yo no era señor. le は間接目的格で「彼から」, una blanca 「1 ブランカ (貨)」が asir の直接目的語。「私は彼から 1 ブランカを取り上げる主人ではなかった」。つまりかつてのように, 盲人からそうしていたように, 司祭からはお金をくすねることが出来なかったということ。10-11) todo el tiempo que con él viví: que は関係代名詞で, 時間を意味する先行詞の場合, ここでは todo el tiempo 「全ての時間」であるが, その場合に en (el) que や cuando の代わりに使用可能の例である。「私が彼とともに生きていた全ての時間において」。11) por mejor decir: 「さらによく言えば」(TSW)。12) morí: 過去の限定された期間 (todo el tiempo) の動作を表すのに vivir の点過去 viví を用い, 「生きていた」としているのと同様に, ここの morir の点過去を用い「死んでいた」の意味を表す。もちろんここは諧謔的。

和訳 (p. 72, L10-p. 72, L11)

私が彼とともに生きていた, あるいはもっと正確に言えば死んでいた全期間を通して, 彼からは 1 ブランカたりともくすねることは能わなかった

のです。

p. 72

De la 11

taberna nunca le traje una blanca de vino; mas
aquel poco que de la ofrenda había metido en su ar-
caz, compasaba de tal forma que le turaba toda
la semana; y por ocultar su gran mezquindad, de-
cíame:

15

16

11-12) de la taberna nunca le traje una blanca de vino: de は起点, 「酒場から」。le は間接目的格で「彼に」。una blanca de vino 「1 ブランカ分のワイン」。以前盲人がラサロにワインを買いに行かせた (LT1B, p. 62, L1) が, その時渡したのが 1 マラベディであった。つまり 1 ブランカの 2 倍の額に相当する。cf. LT1A, p. 55, L9。13-14) aquel poco que de la ofrenda había metido en su arcaz, compasaba: →compasaba aquel poco que había metido de la ofrenda en su arcaz。compasaba < compasar 「コンパスで測る (…), 調節する」 (TSW), 「何かをコンパスで分析, あるいは測定する。(…) 同様に類推により何かを調整, 測定, 調和させる。それにより超過や欠乏のないようにする」 (AUT), 「コンパスで測るように出し洩り, 節約すること」 (JCF, p. 118)。つまりここでは, きちんと量を決めて少しずつ食べるという意味。poco は不定代名詞, つまり aquel poco 「あのわずかな量」。ofrenda には「奉納, 供え物, 喜捨, 寺への寄進, (…) 献金」 (TSW), 「ミサやその他の機会に信者が供養のために持って行くパンやワイン [などのこと]」 (RAE23) といった意味があるが, ここでは司祭が大箱に投げ入れていたお供えのパン (bodigo) のことである。cf. p. 70, L1-L4。que は関係代名詞で先行詞は aquel poco, 関係節中で核となる動詞定形の había metido に対し目的格。de は起点の用法で

「～から」。「彼がお供え物から大箱に入れていたあのわずかな量を少しずつ食べていた」。14) de tal forma que: de forma que に直説法を核とする節が続くと、「それで、それゆえ (=de modo que)」(TSW) の意味となる。これに forma にかかる tal 「そのような」が付け加わったものとする。14-15) le turaba toda la semana: turaba<turar 「(aturar 「我慢する」に由来) (自動詞, 廃用語) 長く続く」(RAE23), 「何かが長持ちする。今日で言うところの durar」(AUT), 線過去の 3 人称単数で, 主語は L13 の aquel poco. 「あのわずかな量は彼に 2 週間ずっと長持ちしていた」。15) por ocultar su gran mezquindad: ここでの por は目的の para と同義ととる。「彼のとてつもないケチぶりを隠すために」。15-16) decíame: →me decía, me は間接目的格「私に」, decía<decir 「言う」の線過去で, 習慣的動作を表す, 主語は司祭, 「(彼は) 私に言っていたものだ」。

和訳 (p. 72, L11-p. 72, L16)

私は 1 ブランカ分のぶどう酒も, 酒場から彼に 1 度たりとも持って行ったことはありません。しかしながら彼が大櫃に供物のなかから投げ入れていた, あのわずかな量をケチケチ食べていたので, それは丸々 1 週間持っていたのです。そして自分のすごいドケチぶりを隠すために私に言ったものです。

p. 72

— Mira, mozo, los sacerdotes han de ser muy 17
templados en su comer y beber, y por esto yo no me
desmando como otros. 19

17) mozo: 「若者」の意味であるが, ラサロに対しての呼びかけに用いられている。17) han de ser muy templados: haber de + 不定詞 で義務を表す。「とても控え目でなければならない」。18) por esto: 「それゆえ, そこ」(TSW)。18-19) yo no me desmando como otros: me desmando<

desmandarse 「無法なふるまいをする」(TSW), 「抑えがきかない」(DEM)。como otros *sacerdotes*, como は類似の意味で, ここでは当然他の司祭が控え目であるように, 自分もそうである, の意味にとる。「他の司祭と同様に, 私は無法なふるまいをしないのだ」。

和訳 (p. 72, L17-p. 72, L19)

「良いかね, 君。司祭は自身の飲食に極めて控え目でなければいけないんだよ。それゆえ私は他の司祭と同様にだね, 抑制しているというわけさ」。

p. 72

Mas el lacerado mentía falsamente, porque en co- 20
fradías y mortuorios que rezamos, a costa ajena
comía como lobo y bebía más que un saludador. 22

20) el lacerado: 形容詞の lacerado は「不幸な」の意味で用いられていた (LT1B, p.62, L26) が, ここでは定冠詞を伴い名詞として用いられ, 司祭を指している。RAE23 曰く, 「古語, けちな (mezquino), しみったれた (miserable), さもしい (roñoso), 名詞としても用いられていた」。

20) mentía falsamente: 直訳すると「間違っ嘘をついてた」ともなりうるが, 二重否定の類ではなく, falsamente は mentía の意味を強化しているととる。即ち, 「人を欺いて嘘をついていた」。

21) mortuorios: mortuorio 「m. 葬礼」(TSW)。21) que rezamos: →*en* que rezamos。que は関係代名詞で, 先行詞は *cofradías y mortuorios*。「我々が祈った信者の集まりや葬儀 (においては)」。

21) a costa ajena: 「他人の支払いにより」。

22) saludador: 「まじない師」(TSW), 「狂犬病患者に「健康 (salud)」をもたらす民間療法師, 呪術師。口中の上顎に十字 [のしるし] があると言われているが, 霊験が失われないようにその十字を人に見せることはない。(…) saludador は唾液で治療するのが常であったが, おそらくその唾液

を神聖化するために口中に十字があったと言われている。したがって余程多くの唾液を使ったのであろうから、しばしば口を湿らす必要があったのは当然である」(JCF, p. 119)。これらの資料と本文のこの個所からでは、果たして *saludador* が大量に飲んでいたのは水かぶどう酒か分らないが、*beber* は基本的に飲酒の意味で用いられることから、L22 の *bebía* は食事に伴う飲酒の意味にとり、*saludador* は喉の渇きに伴って水を飲むことの意味にとる。ちなみに『ドン・キホーテ』続編 25 章に、猿で占いを行う「ベドロ親方」なる人物が人の 6 倍話をし、酒を 12 人分飲むとの記述があるが、ロドリゲス・マリン VI (p. 114) は何もコメントしていない。
和訳 (p. 72, L20-p. 72, L22)

しかしあのケチな男は全くの嘘をついていました。なぜなら我々が祈っていた信徒の集まりや葬礼において、他人の支払いでは彼は狼のように食べ、そして呪術師よりも大量に飲んでいたので。

p. 72

Y porque dije de mortuorios, Dios me perdone, que 23
jamás fui enemigo de la naturaleza humana sino en-
tonces. 25

23) Y porque dije de mortuorios, Dios me perdone.; この *Dios me perdone*, は 2 つのコンマにより挿入された句のように見えるが, *porque* が導入する理由の従属節に対して, コンマを伴って後置される主節ととる。そしてこの主節は神 (*Dios*) に対して直接の命令を用いた *Perdóname Dios*. とはニュアンスが異なり, 間接命令ととる。即ち接続詞の *que* を伴い, 並べ替えると, *Que Dios me perdone porque dije de mortuorios.*, 「私は葬礼について話したので, 神様私をお許してください」。23), *que*: コンマを伴い, 説明的に軽い理由の節を導入する接続詞の *que*, あるいは意味が希薄な *que*。前者の場合, 「と申しますのも」。24-25) *sino*

entonces: →sino entonces *lo fui*, 「その時私はそうであったのを除いては」。

和訳 (p. 72, L23-p. 72, L25)

葬礼についてお話ししてしまったので、神様私をお許してください。と申しますのもその当時私がそうであったのを除いては、私は決して人類の敵であったことはなかったのですから。

p. 72

Y esto era porque comíamos bien y me har-	25
taban.	26

25-26) esto era porque comíamos bien y me hartaban: 「このことは porque 以下の節の理由によるものでした」。中性の代名詞 *esto* が受ける前文の内容は、L25 で補った *lo fui* ととる。即ち「私がそう (= 人の死を願う人類の敵) であったのは porque 以下の理由によるものでした。porque 以下の節は、comíamos と hartaban の2つの動詞定形により構成されている。そのうち後者 hartaban<hartar 「満腹にさせる」は、3人称複数を用いた無人称ととる。更に語を補い、comíamos bien y me hartaban *en los mortuorios* とする。「このこと [つまり「私」が人類の敵であったこと] は、[葬礼では] 我々は十分に食べ、私をお腹一杯にしてくれたことが理由でした」。

和訳 (p. 72, L25-p. 72, L26)

このことはつまり、[弔いの席では] 我々は十分に食べ、私を満腹にしてくれたことが理由なのです。

p. 72

Deseaba y aun rogaba a Dios que cada día	26
matase el suyo.	27

27) matase: <matar「殺す」の接続法過去3人称単数, 名詞節で用いられ, 主節はそれぞれ deseaba<desear「望む」, rogaba<rogar「懇願する」の2つの動詞定形を核としている。27) el suyo: mataseの目的語で「神のもの」, 即ち el *siervo* suyo「神の僕(しもべ)」の意味にとる。

和訳 (p. 72, L26-p. 72, L27)

私は, 神様が自分のしもべを毎日殺すように望み, 更には強く祈ってさえたのです。

p. 72

Y cuando dábamos sacramento a	27
los enfermos, especialmente la extremaunción, como	
manda el clérigo rezar a los que están allí, yo cierto	
no era el postrero de la oración, y con todo mi cora-	30

p. 73

zón y buena voluntad rogaba al Señor, no que le	1
echase a la parte que más servido fuese, como se	
suele decir, mas que le llevase deste mundo.	3

27) sacramento: 「秘跡」。7つの秘跡のうちの1つが, L28の extremaunción「(宗[教]) 終油の秘跡, 臨終の塗油」(TSW)。28) especialmente la extremaunción: →especialmente *cuando dábamos* la extremaunción, 「特に我々が臨終の塗油を行っていた時には」。28-29) como manda el clérigo rezar a los que están allí: mandar a +人+不定詞で, 「～に～するように命じる」。接続詞の como を理由の意味ととれば, 「司祭はそこにいる者達に祈るように命じるので」となるが, 「時の cuando の意味を伴う como の使用が多かった」(FRCA, p. 53) ことを反映させると, 「司祭が命じるとき」となろう。尚 como には「～するとすぐ(=así que)」(TSW)の意味もある。cf. LT1C, p. 63, L3。29-30) yo cierto no era el postrero

de la oración: 「私は確かに祈りの最後の者ではありませんでした」。皆でのお祈りにおいて若干の速さのズレが生じる場合、ラサロは遅れることがなかったということ。つまりラサロは盲人に鍛えられたお陰で祈祷の文句を人より充分知っていたということと、病人の死を願って率先して祈っていたという両方の意味にとれる。cierto 「副詞として用いられる。確かにそして本当に (cierta y verdaderamente) と同じ意味」 (AUT)。30-p.73, L1) con todo mi corazón: con todo su corazón 「心の底から」 (DEM)。1) buena voluntad: *con toda* buena voluntad 「全くの好意から」、つまり悪意がなかった。1-2) no que le echase a la parte que más servido fuese: 初めの que は名詞節を導入する接続詞で、節の核となる動詞定形は echase<echar 「横たえる」の接続法過去、主語は el Señor 「神」 (TSW)、主節の核となる動詞定形は rogaba<rogar 「祈る」、主語は「私」。ただしこの que の前に主動詞を補うと、それに no が伴う。no *rogaba* que le echase 「神が彼を横たえるように私は祈らなかった」。le はレイスモで「彼を」。2 番目の que は関係代名詞で、*en que el enfermo* fuese servido más と語を補い並べ替える。que の先行詞は la parte 「その場所」、この形容詞節の核となる動詞定形 fuese servido は、他動詞の servir 「聴従する」の受動態。特に ser servido には「願いがかなえられる、きかれる」 (TSW)、「請願や請求されたことに従って、何らかのものを欲する、あるいは好むこと」 (AUT) といった意味がある。RAE では ser alguien servido de algo とあり。「(病人の) 最も願いがかなえられたその場所 [つまり神の御許] に神が彼を横たえるように私は祈らなかった」。2-3) como se suele decir: 「常に言われているように」。臨終の際の祈りとしては、L1-L2 の「神の御許へ横たえる」が普通であったということなのだろう。3) mas que le llevase deste mundo: ここでの mas は L1 の no と相関して用いられる、sino の意味にとる。即ち語を補い書き換えると、*sino rogaba* que le llevase de este mundo, 「(神が) 彼をこの世から連れ出す

ように（私は）祈っていた」。

ところで ALBL と本稿で底本とした VGC における表記とは異なり、この L1 の *le* が、FRCA と JCF では *la* となっている。「この *la* は *la oración* 「祈り」を指すことになるが、〔初版である〕ブルゴス版の誤植である可能性はある。というのもアルカラ版、アントワープ版では *le* となっているからである」（FRCA, p.53）。L1 の *rogaba* から L3 の *decir* までの先達の訳。「もっとも、人様がよくお唱えなさるように、このお祈りを最も神慮にかなうように、御嘉納くださいませというのではございません」(AYL), 「もっとも、世間でひとさまがするように、どうか神様の御心のままにと唱えたわけではなく、」(UNL), “I prayed to the Lord not that He should do His will (...)” (MAPE)。

和訳 (p. 72, L27-p. 73, L3)

そして我々が病人に、秘跡のうちでも特に臨終の塗油を執り行っていた時などには、そこに立ち会っている者達に司祭が祈るように命じると、私はお祈りに後れを取るということはありませんでした。そして私は心の底から、全く悪いとも思わずに、神様に向かって世間で良く言われているように、その病人を最も願いがかなえられたところに横たえるようにと祈るのではなく、彼をこの世から連れ去るようにと祈っていたのです。

[続く]

参考文献 (() 内は引用の際の略号)

会田由訳 (1941). 『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』, 東京: 岩波書店 (=AYL)

Alonso, Martín (1986). *Diccionario medieval español: desde las Glosas Emilianenses y Silenses (s. X) hasta el siglo XV*, Salamanca: Universidad Pontificia de Salamanca (=MED)

Alpert, Michael ed. (2003). *Lazarillo de Tormes and The Swindler: Two Spanish Picaresque Novels*, London: Penguin Books (=MAPE)

Blecua, Alberto ed. (1975). *Lazarillo de Tormes*, Madrid: Editorial Castalia

(=ALBL)

Cejador y Frauca, Julio ed. (1962). *Lazarillo de Tormes*, Madrid: Espasa-Calpe (=JCF)

Cervantes Saavedra, Miguel de (Rodríguez Marín, Francisco ed.) (1958). *Cervantes Don Quijote de La Mancha I*, Madrid: Espasa-Calpe (=ロドリゲス・マリン I)

Cervantes Saavedra, Miguel de (Rodríguez Marín, Francisco ed.) (1957). *Cervantes Don Quijote de La Mancha VI*, Madrid: Espasa-Calpe (=ロドリゲス・マリン VI)

Covarrubias Horozco, Sebastián de (1611, 2006). *Tesoro de la lengua castellana o española (edición integral e ilustrada de Ignacio Arellano y Rafael Zafra)*, Madrid: Editorial Iberoamericana (=COV)

García de la Concha, Victor ed. (1989). *Lazarillo de Tormes*, Madrid: Espasa Calpe (Colección Austral, a-12) (=VGC)

廣澤明彦 (2015). 「“Lazarillo de Tormes” (1554) の文法的特徴についての考察 — 第一章 (上) —」, 『拓殖大学語学研究』 132 号 (拓殖大学言語文化研究所), pp. 235-193 (=LT1A)

廣澤明彦 (2016). 「“Lazarillo de Tormes” (1554) の文法的特徴についての考察 — 第一章 (中) —」, 『拓殖大学語学研究』 134 号 (拓殖大学言語文化研究所), pp. 121-176 (=LT1B)

廣澤明彦 (2017). 「“Lazarillo de Tormes” (1554) の文法的特徴についての考察 — 第一章 (下) —」, 『拓殖大学語学研究』 137 号 (拓殖大学言語文化研究所), pp. 211-260 (=LT1C)

宮城昇 (ほか) 編 (1999). 『現代スペイン語辞典 (改訂版)』 東京: 白水社 (=DEM)

中岡省治 (1993). 『中世スペイン語入門』 (=IEM) 東京: 大学書林

Pedraza, Felipe B. et al. (1980). *Manual de literatura española. II Renacimiento*, Estella (Navarra): Cénlit Ediciones

Real Academia Española (1992). *Diccionario de la lengua española (21ª ed.)*, Madrid: Espasa-Calpe (=RAE21)

Real Academia Española (2014). *Diccionario de la lengua española (23ª ed. Edición del Tricentenario)*, México D. F.: Espasa Libros (=RAE23)

Real Academia Española (1963). *Diccionario de autoridades (ed. facsímil)*, Madrid: Gredos (=AUT)

Real Academia Española (2009). *Nueva gramática de la lengua española mor-*

- fología, sintaxis I*, Madrid: Espasa Libros (NGLE1)
Rico, Francisco ed. (1987, 2002¹⁶). *Lazarillo de Tormes. Edición de Francisco Rico*, Madrid: Cátedra (=FRCA)
高垣敏博編 (2007). 『西和中辞典』 東京：小学館 (=SDEJ)
高橋正武 (1984). 『西和辞典 (増訂版)』 東京：白水社 (=TSW)
拓殖大学外国語学部平成 22 年度廣澤ゼミ (4 年) 編 (2011). 『「ラサリーリョ・デ・トルメス」の注釈』 (私家版)
拓殖大学外国語学部平成 26 年度廣澤ゼミ (4 年) 編 (2015). 『「ラサリーリョ・デ・トルメス」の注釈——第 2 章 (抄)』 (私家版)
牛島信明訳 (1997). 「ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯」, 『ピカレスク小説名作選』, 東京：国書刊行会 (=UNL)
山田善郎 (監修) (1998). 『中級スペイン文法』 東京：白水社 (=GLE)

(原稿受付 2018 年 1 月 17 日)